

会議議事録

会議名	2024年度第2回福祉分野教育課程編成委員会
対象学科	介護福祉科
開催日時	2025年2月28日(金) 14:30~16:30
場所	本校1階会議室
出席者 (敬称略)	①企業等委員:丸山泰一委員(社会福祉法人池上長寿園専門参与)、戸嶋哉寿男委員(杉並定期巡回連絡会代表) ②本校委員:川口拓也(校長)、松田 朗(介護福祉科学科長)中嶋純也(介護福祉科教員)、渡辺愛子(介護福祉科教員)、榊原幸之(事務局長)(計5名) ③委員会事務局:川内靖美 (参加者合計8名)
欠席者	オブザーバー:前田律子(副校長)
配付資料	事前送付:資料1:2024年度第1回福祉分野教育課程編成委員会議事録(案)、資料2-1:2024年度第1回委員会以降の主な経過報告、資料2-2:2024年度介護実習報告、資料2-3:介護福祉科・看護科合同プロジェクト、資料2-4:第37回介護福祉士国家試験受験報告、資料2-5:2024年度教員研修計画・実績、資料2-6:卒業時達成課題自己評価報告、資料3:2025年度学事日程、資料4:介護実習計画(案)2025年度版、資料5:カリキュラムマップ2025-2026
議長	松田学科長
議題等	<p>1. 校長挨拶</p> <p>川口校長より、介護福祉科は、定員を30名から60名に倍増することができた。高田馬場という地の利を生かして留学生の受け入れを図りたい。募集は現在60名を確保できているが、その内訳は外国人のほうが多い。</p> <p>我々専門学校に国から与えられたミッションに、社会人のリスキリングと留学生の職業教育が加わった。介護の世界だけでなく、労働力として留学生の方に支援をいただかないと国が回っていかないという背景があり、それに先鞭をつけたのが介護福祉科だと思っている。これから魂を込めていくことになるが、まずは次年度に向けて日本語の専任教員を一人確保し、さらなる日本語のスキルアップを図っていく。</p> <p>本日は、今年度後半の振り返りが中心になるが、アドバイスやお気づきの点があればご示唆をいただきたい、との挨拶が行われた。</p> <p>2. 前回委員会議事録の確認(資料1)</p> <p>特段の意見、訂正箇所はなく、個人情報等に配慮して公開することが了承された。</p> <p>3. 2024年度の活動報告等</p> <p>※前回委員会以降の主な経過</p> <p>(1) 退学状況(2024年度)(資料2-1)</p> <p>(2) 就職状況報告(資料2-1)</p> <p>(3) 授業アンケート(資料2-1)</p>

- (4) 学生募集 (資料 2-1)
- (5) 介護実習報告 (資料 2-2)
- (6) 合同授業報告 (資料 2-3)
- (7) 第 37 回介護福祉士国家試験受験報告 (資料 2-4)
- (8) 教員研修実績 (資料 2-5)
- (9) 課題達成度・学生自己評価等 (資料 2-6)

松田学科長、中嶋教員、渡辺教員より資料に基づき説明が行われ、確認、了承された。詳細は別紙のとおり。

4. 2025 年度介護福祉科学事日程 (資料 3)

松田学科長より資料に基づき説明が行われ、確認、了承された。

5. 2025 年度介護実習日程 (資料 4)

松田学科長より資料に基づき説明が行われ、確認、了承された。

6. カリキュラム (資料 5)

松田学科長より資料に基づき説明が行われ、確認、了承された。詳細は別紙のとおり。

7. 次回日程、その他

次回の日程については、2025 年 8 月 8 日 (金) 14 時半開始とすることが了承され、閉会した。

以上

2024 年度第 2 回福祉分野教育課程編成委員会の主な討議内容

3. 2024 年度の活動報告等

○松田学科長、中嶋教員、渡辺教員より、資料に基づき以下の補足説明があった。

※前回委員会以降の主な経過

(1) 退学状況 (2024 年度) (資料 2-1)

(2) 就職内定状況 (資料 2-1)

- ・ 出足は遅かったが、1 月末時点で就職希望者は全て内定を得た。
- ・ 留学生の 1 名は一度帰国したいとの希望があり、就職活動をしていない。

(3) 2024 年度授業アンケート (資料 2-1)

- ・ 総じて学校平均と同じか、少し上回る結果となった。
- ・ 特に 2 年生の評価が高くなった。夏休み以降、国家試験取得に対する意欲が上がり、授業や様々な学校活動に熱心に取り組んだ結果だと思う。

(4) 2025 年度生 (2024 年度) 学生募集 (資料 2-1)

- ・ 定員には到達できると考えている。
- ・ 留学生は日本語能力の試験を行い、日本人学生を含めて A・B クラスの能力が均等になるようにクラスを編成した。

(5) 介護実習報告 (資料 2-2)

- ・ 在宅・地域密着型の「介護実習 V」を実施した。(2 年生・夏休み 4 日間)。今年から始まったもので、小規模多機能型居宅介護に焦点を当てて行った。
- ・ 「在宅実習 IV」はグループホーム (認知症対応型共同生活介護) で 4 日間の実習を行った。(1 年生・8 月 19 日から)
- ・ 2 年生最後の実習である「介護実習 III」は 14 カ所で、全員終了した。介護過程の展開を実施し、それを基に 1 月の終わりに事例研究を行い、成果に結びつけた。
- ・ 「介護実習 II」は、1 年生が 19 施設に行き、本日をもって終了する。
- ・ 本年度は、実習支援システムを使った。スマホ・パソコンで学生、実習先、学校の三者で情報共有ができる。来年度は留学生が増えるので、しっかりフォローしていきたい。

(6) 合同授業報告 (資料 2-3)

- ・ 12 月 9 日に看護科 2 年生、介護福祉科 1・2 年生、合同プロジェクトを実施した。昨年に続いて 2 回目となる。(昨年 1 コマ 90 分→今年 2 コマ 180 分)
- ・ テーマは「避難所生活における多職種連携」とし、お互いの立場で話し合いができることを最終的な目標とした。
- ・ 実際の状況、学生の反応については、資料にある写真とアンケート結果をご覧いただきたい。

(7) 第 37 回介護福祉士国家試験受験報告 (資料 2-4)

- ・ 2 年生全員が受験。

(8) 教員研修実績 (資料 2-5)

- ・ 職能団体、東京都私学財団の研修、資格の更新のための研修を受講。詳細は資料のとおり。

(9) 課題達成度・学生自己評価等 (資料 2-6)

- ・ 「共有できる」「協働できる」は A 評価が増えている。2 年次になり、実感が伴い、より介護福祉士

の視点で自分自身を捉え直すことができたと解釈している。

- ・「創造」「お客様の満足度」に関しては、S評価が増えている。
- ・実習先の担当者からは、コミュニケーション能力や取り組む姿勢でお褒めの言葉を頂戴している。
- ・具体的なアンケート調査の結果は、資料をご覧いただきたい。

○質問・意見と回答等

質問・意見等	回答等
<p>(5) 介護実習報告について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習支援システムは、いろいろな母国語を入力すると日本語で記録されるのか。 <p>(6) 合同授業報告について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護と看護の連携は施設でも在宅でも大事なところなので、すごくよい企画だと思う。テーマに震災を取り上げたのも面白い。 <p>(9) 課題達成等・学生自己評価等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生のコメントを見ても、すごく成長したことが見てとれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入力日本語に限られている。現場からもリクエストはいただいているので、担当者と連絡を取り合い、改善していく方向で運用している。 <ul style="list-style-type: none"> ・今の1年生も同じアンケート調査をしているので、1年後もいい結果が得られるよう取り組んでいきたい。

6. カリキュラム (資料5)

○松田学科長より、資料に基づき以下の説明が行われた。

- ・今の1年生は、そのまま同じカリキュラムで2年生を迎える。
- ・新1年生も基本的に大きな変更はない。
- ・2年前期の「生活支援技術V」は、終末期、看取りのケアに特化した半期の科目となる。

○質問・意見と回答等

質問・意見等	回答等
<ul style="list-style-type: none"> ・看取りの話は、医療からだけでなく、介護の視点からもしっかりと伝えていくことが大事だと思う。 ・実習中に4週間で2名亡くなったという学生の記録が残っている。増えている実感はあるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・メインの講師は専門の先生にお願いするが、介護の視点で伝える時間も持ちたいと思う。 ・看取り看護は医療と連携して行っている。今の時期は急変が多く、夏のほうが亡くなる方が多いと感じている。 ・在宅のほうもすごく増えている。最期を自宅で過ごしたいという方のために、介護と看護が連携し、医師を含めたチームがすぐにできるような体制もある。

<ul style="list-style-type: none"> ・その場合は、主治医の先生が中心になるのか。 ・厚労省は、ショートステイが看取りをやることをうたっているようだが、実際にショートステイで終末期を考える人が増えるのだろうか。 ・学校では、レポート等でA Iを使うことはあるのか。 ・介護記録を作るソフトがある。将来、半分以上が外国人の介護職になる可能性があるのでは、日本語変換の話が必ず出てくると思う。 ・いろいろなところで音声翻訳機能が標準化される動きもある。翻訳機の性能が上がると、現場レベルで日本語能力を求めなくなるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ケース・バイ・ケースだが、訪問看護が基軸になって医師と介護の連携を取り、そこをケアマネがサポートしている感じだと思う。 ・1週間程度の退院事例だと看護師中心で、介護は少し手伝うくらいだが、1か月ぐらいの看取り期間になってくると介護が頻繁に入るようになる。 ・やれないことはないが、在宅なのに、なぜ最期はショートステイなのかという思いがある。 ・学校としてA Iを駆使するところまでは行っていない。学生は個人差はあるが、ある程度使いこなせる留学生は普通に使っている。 ・「情報と社会」という科目の中で、生成A Iの基本的な使い方の指導をリクエストしている。社会に出て通用していけるように、道具として使うことは推奨していきたい。 ・言語はただの道具ではなく、今まで生きてきた風土や日本人としての血に通じるところがあるので、利用者が日本人である限りは、日本語能力が必要だと思う。相手のことを考えないで、合理的なところだけを押しつけるのは横暴であり、何でも標準化という話ではない。
---	--

以上